北欧神話出身の執筆者

人類最古の執筆者

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

これは、本が好きで好きでたまらない転生者が北欧神話世界に転生した物語。

人類原初の執筆者の軌跡。

但しＦＧＯ時空だとする。

目次

神秘法則 ―― 1
来訪者 ―― 9
執筆開始 ―― 17
見つけた光明 ―― 25

神秘法則

転生っていう現象は実在するらしい。少なくとも実体験からなのだから、この認識に間違いはあるまい。

寝食を忘れながら本を読み漁る生活が祟ったのか、余命宣告から二か月で死んでしまった。そんな八十何歳だったかの人生の記憶を、人格ごと引き継いで赤ん坊になった。

エピソード記憶も漏らさずあり、時間の経過で薄れても、何一つ欠けている記憶は無い。

子供の頃から大人びていた僕は、何処か大人からして気味が悪く思えるらしく、それに気づいてからは子供らしく振舞うことにした。

そんな感じで一人前になるまで狩りをしたりして過ごし、やがて大人と認められると同時に僕は森の中に家を作って隠れ住むことにした。

村のみんなはそれを否定しなかった。いや、正確に言えば、旅に出たと思っているのだ。

確実に否定されるだろう奇行。そう認識されると思っていたから、真実を話す気はなかった。

ここはミズカルズ。死を免れない人間の国である。

うん、明らかに北欧神話の世界です本当にありがとうございました。

森の中の生活は意外と楽しい。

朝、日が昇るのと同時に目覚め、木の上に建てた家から注意して降りる。強い日差しは木々に遮られ、心地よい光が森に満ちる。視界が葉に反射した爽やかな緑に染まっているのも、もうこの数年で慣れた。

この家を作るときは秘密基地を作るみたいでドキドキしたものだ。男はいくつになっても少年ということだな。まあ、精霊とかが出てきて一悶着あったが、今は何事もなく共存できている。

降りる方法は草を撚り合わせて作った縄梯子だ。下に何もいない

ことを確認してから降りる。
この森の中にはやたらと強い獣たちが大勢いる。下手したら自作の粗末な鉄砲でも仕留めきれないだろう程強い。
それでも奇襲と罠を駆使すれば、何とか食っていける分の肉は手に入れられる。特に強かったのはイノシシか？いやあれもうマンモスだろと言いたいが、腹に収まればイノシシと変わらない。とても肉が多かったので精霊たちにもお裾分けしようと思ったら、どうやら彼らは肉を食べないらしい。なので代わりに自作の琥珀の首飾りを送った。
現在は森の中で見つけた岩塩で塩漬けにしている。とはいっても量が多いので、近々どうするか考えないといけないだろう。
そう思いながら、保管庫として活用している大樹の洞を見回る。時折、鳥が住み着いていたりするが、争いにはならない。彼らは温厚で、話し合えば分かってくれるのだ。
昨日の内に採取していた可食の野草の入っている洞からいくつか取り出し、別の洞から調味料になる果実や加工物を選んで取り出す。
塩もあるが、今日は塩漬け肉があるから入れなくていいだろう。これ以上入れると栄養過多になってしまう。
石を繰り抜いた鍋のある地点まで歩き、近くの自作の桶で川まで水を汲みに行く。
川はすぐ傍だ。道なり（といっても道なんてないが）に進んで数分も過ぎないうちにせせらぎの音が聞こえてくる。視界が開けると、日光を反射して黄金の流れるように輝く川が見えた。
途中の岩にぶつかって跳ねる水滴が宝石のように美しく舞い踊り、柔らかく流れる清水は清らかな乙女を思わせる。現代のそれとは比べるべくもない清らかさだが、それでも生水で飲むのはダメだ。
川辺に着き、岸で膝を突いて水を汲む。自作の桶は、しかし自作の割には良くできている自負がある。隙間は無いし、これでもう数か月だが未だに壊れない。コツをつかむまでに何回も作り直したことを思い出すと遠い目になる。
その頃は川辺で食事をしていたなぁ……などと過去に思いを馳せ

ていると、急に川底が近づいてそのまま溺れてしまう。
「がぼぼぼぼぼっ!?」
「ふふっ」
幸い、足で立てる程度には浅いので慌てずに川底の石に足を付ける。急な転落だが、原因……というか犯人は分かっている。冬でもないのでそこそこ気持ちいい程度の冷たさなので助かった。これが冬なら凍え死ぬところだったかもしれない。
バシャッ、と顔を上げそいつを見て、僕はこう言ってやった。
「全く、こういう悪戯はやめろよ。危ないだろうが」
「知らないわ。貴方が来てくれなくなったのが悪いんじゃない」
「来ないって……一日一回は来てるじゃないか」
「前は一日三回だったわ」
顔を上げた先には全身がここの川の水で構成されたように清楚な印象を受ける全裸の女性がいた。長い髪で大事なところは隠れているし、足は半分水と同化しているが、それでも痴女に見えてくる。
こいつは水精霊(ウィンディーネ)。僕の魔術で生み出した思念体である。
原理としては純粋な神に近い。つまり人の「水に対する信仰」を糧として生きる存在だ。まあ、魔力を食べれるようになって来たらしいので、信仰が無くても存続できるかもしれないが。
嫋やかに、しかし悪戯な笑みを浮かべる彼女は、僕(生みの親)に会えて嬉しそうに微笑んでいた。
その笑みには流石に罪悪感が湧き、石鍋の位置をここに戻そうかなどと思案する僕であった。

「じゃ、またね」
「もう行くの?」
「ご飯作らないといけないからね」
「むー」
暫く談笑して、その後に石鍋まで水をぶち込みに戻る。
さて、ご飯だ。

ところで、あなたは「巫女の予言」というものをご存じだろうか？
そう、北欧神話の始まりの、予言の巫女ヴォルヴぁがオーディンに語った世界の予言である。
ヴァルハラの主神オーディンは一度死んだヴォルヴァの魂を呼び出し、過去と未来を明らかにするよう命じた。
その後の彼女の消息は知らされていない。
しかし、もし彼女が、オーディンに僅かの間だけ現世での活動を許されたのなら？
もし、その間に彼女があるイレギュラーに自身の英知を授けたのだとしたら？
これは語られざる神話の断片。人類最古の執筆者の誕生を祝う為に、彼女はそこを訪れた。

「この森に、彼の者が……」
新緑溢れる森の奥深く、到底旅に適しているとは言えない服装の女性が呟いた。
顔はフードに覆われて見えない。いや、仮に下から覗いたとして、彼女が許可しない限りはその顔を拝むことはできないだろう。
ただ一本の杖を頼りに獣道を行く。体格の大きい彼らに踏み固められた道は、少なくともその他のところを歩くよりはましな程度には開けていた。彼らの自重で固まった地面は歩きやすいが、それでも唐突な獣との遭遇という可能性は考慮しなければいけなかった。そう、このように。
「ＢＲＲＲＲＡＡＡＡＡＡＡＡ！！！！」
現れたのは猪。それも周囲の木々を薙ぎ倒しながら進んでいる巨体は、到底この獣道程度に収まらないのがわかる。
その大きさは女が見上げなければならないほど大きく、吹き飛ぶ木の枝が運の悪い羽虫を叩き落す。
それを見た女は慌てた様子を見せずに杖を掲げ、何かぶつぶつと呟

けば……なんと、驚くことに猪が歩を止めたではないか！
足を折りたたんで地に腹を付けた猪の額を、女は優しく撫でる。そしてそこから去っていった。
方向は先ほどの目指していた道の先。この森で数少ない川に繋がる道である。
猪は女の後姿を眺め続け、とうとうその姿が新芽よりも小さくなってから立ち上がった。
そしてブルリと体を震わせ、そのまま周囲の木々を押し倒しながら旋回し、元来た道を戻る。
のっしのっしと歩く姿から先ほどのような凶暴さを見取ることは、もうできそうになかった。
尚、薙ぎ倒された木々はこの後に森の微生物たちが美味しく頂いた。猪が薙ぎ倒し、積み重なると道を封じる倒木を、微生物たちが食らう。何気に共生関係だったりする。
え？　そんな早く分解できるわけがない？　いやいや、こいつら唯の微生物じゃないですし。

「……何故か唐突に生魚を食べたくなってきたな」
ふと思ったことを口にする。今世では良い調理器具も手に入っていないし、石で包丁を作っても魚は捌けないだろう。というか刺身は作れないだろう。それでも食べたいというのなら……鉄の精錬に手を出すしかないな。でもこの世界、所々物理法則が可笑しいし……大丈夫だろうか？
捕らぬ狸の皮算用。そもそも鉄鉱石すら見つけられていないというのに、何を心配しているのやら。
それより先に僕にはやるべきことがあるだろう。獣たちへの対処法とか。
未だに逃げ回り続けるしかできない獣たちへの対処は、それはもう、武力を持たない僕には到底無理なこと。

それでも罠ぐらいはしかけられるだろう。
猪のような巨体が埋まる落とし穴なんて、どれぐらい掘ればいいんだよ。そもそも隠し切れないし自分もそこら辺使えなくなるわ。
成程、それもそうだ。
……先ほどから何を一人で自問自答しているのだろうか。これが一人暮らしの弊害か。
でもさっさと調理を済ませてしまうべきか。
まずは火熾しだ。これも、何と言うか現代の常識が通用しない熾し方なのだ。
右手にちょっと黄色い不思議な鉱石を持ち、左手でちっさい丸太を抑える。そして、その丸太に向けて雷の様に右手を振り下ろす。
すると、雷のような轟音と共に何故か電気が発生、すっごいびりびりする手を退けると丸太に火がついているのがわかる。正直物理法則舐めてんのかって言いたくなるが、これがこの世界のルールなのだから仕方がない。
小さな火に息を吹きかけながら、暇な思考を働かせる。
この世界の法則、僕は神秘法則と呼んでいるのだが、これは案外単純な代物だ。何せ突き詰めれば二つの原則に集約される。即ち、「神になぞらえ、その行いを再現する」、「強い空想に従う」ということだ。訳が分からないだろうから、先程の火熾しを例に挙げてみよう。
「雷に準えた石を」「雷の様に上から振り下ろす」という二動作。これはつまり雷霆を模した行動であり、それによって丸太に火をつけたわけだ。この行動の結果がどうなるのかというと、「石が雷に変換される」なんて馬鹿げたことが起こる。つまり、準えたものに変化するのだ。
どうやらこの世界、「マクロの行動はミクロの結果と対応」するようで、嵐の後はあちこちの木々や土が渦を巻いていたりすることがある。その逆もまた然りの様なのだ。
先ほど「神」といったが、要するに大きな現象、自然現象などの「再現」を人為的にできるという事。ミクロの行動がマクロの結果を「再現」することができるのだ。

で、強い妄想に従うということだが、この法則を発見した時の閃きから分かったことだ。

「何故、今世では雷を見たことが無いのに、こんな再現ができたのか？」という疑問。誰がやってもこうなら、別の場所で起こった行動の再現なのかもと思えるが、違った。

他の者に同じことをやらせると、それこそ静電気程度の物しか出せないのだ。誰がやっても同じ結果、他の場所で起こった現象を再現しているのなら僕と同じような結果になるはずなのに、だ。

ここから検証を繰り返し、結果として「強い思い込み」、或いは「自身の記憶」に存在する現象と、「自身の行った行動」が対応していることが分かった。

即ち、神秘法則とは「行動の結果を記憶を参照して再現する」ことだとわかった。

では次の疑問は「世界の安定性」だ。

僕がいくら地割れの再現をしようとも、完全に地割れは再現されない。そもそも、記憶が再現されるというのならば、僕の歩く大地はアルファストの様な物になっていなければおかしいのだ。

ここで出てくるのが「神の絶対性」である。この世界は神の存在が他の法則よりも比較的優先されるのだ。故に地母神である台地には傷をつけるのが難しい、ということだ。

神が実在するのは驚いたし、まさかお目にかかることがあるとは僕も思わなかった。だが、そのお陰でこの世界の仕組みが薄っすらと分かったのだから良しとしよう。死にかけたが、それに見合う成果はあった。

まあ、神秘法則で世界の全てが構成されているとは思っていない。世界とは、そんな単純な物ではない。

それでも今日を生きれるのだから、知った甲斐はあった。つくづく自身の知識欲に感謝だ。

因みに水精霊を生み出したと先ほど言ったが、それは中々に大変な作業だった。

まず「魔法」という存在が確実に存在すると自身に確信させるため

の自己暗示。お手伝いを創るために試行錯誤して、一番納得のいく論理で生み出されたのが彼女だ。
僕の場合、納得のいく論理に基づいていれば、ある程度神秘法則は制御できるようだ。この術を僕は「魔術」と呼んでいる。「魔法」というマクロと対応するミクロだ。
マクロの劣化版にしかならないという点が扱いにくいところだが、それさえ守ればいろいろできてしまう。今世の世界は本当に面白いところだ。
但し、他の人がいると自身の法則に乱れが入ることがあるため、僕は誰もいない森の中に引っ越したというわけである。
「……ふぅ」
丸太に燃える火を眺めながら、石鍋に火をかける。
ゆっくりと温まっていく水に木の根やらを入れ、灰汁を取っていく。
見上げた空は、梢に囲まれ青々と澄み渡っていた。
気付けば枝の擦り合う風音の中に足跡が聞こえた。
軽妙で、リズムの整った歩調。
どうやらお客さんのようだ。
一旦、調理の手を止め、背後を振り返って客に言う。
「やあやあ、よくこんな辺鄙な所まで来たね。迷ったのかい？　それとも此処に用があるのかい？　まあ、兎も角いっぱい食べて行きなよ。もうすぐ出来上がるところなんだ」
久しぶりに紡いだ歓迎の言葉は、どうやら上手く伝わってくれたみたいだった。

来訪者

水を啜る音が、草木の音に紛れて響く。
森の中の開けた場所に、男と女が二人きり。しかしその事態に色気は無い。
女は植物で編まれたローブを纏い、男は動物の皮で縫った服を纏う。
女のローブは所々に穴が開いており、襤褸であることが見て取れる。しかしそれでも佇まいには神聖な物があり、それは女の身の内から溢れてきているのが分かるだろう。
男の服は繊細な刺繍と細心の加工がなされており、それこそ人の知恵の恩寵である。その趣には強い理性と自我が見て取れ、それだけでその偉大さが分かる。
両手に持つ石は中央が大きく凹んでおり、擂鉢の様になっている。その中身は獣の骨を煮込んだ湯で、そこいらの雑草と肉を煮込んだスープ。
それが神秘の力なのか、或いは素材が良いのか、はたまた舌が馬鹿なのか。
そのスープは特に不味くも無く、普通に食せる程度には、整っていた。
「で、話ってなんだい？」
男――僕が口を開き、対面の彼女に話を促す。
僕は未だに彼女の名前も知らず、しかしどうやら彼女の方は僕の事を知っているようで、それがどうにもひっかかる。
まあ、こんな時代だ。科学ではありえないような情報の漏洩があってもおかしくない。植物から聞いたとか、リアルにある時代だし。
「これは失礼しました。私の事はどうぞ、雌山羊（ヘイズルーン）とでもお呼びください。未だ名もなき卑賤の身ではありますが、こうして智慧王のお目に掛かれ、光栄の至りでございます」
「智慧王？　不思議な名前で呼ぶんだな。僕の名前は――」
「――いえ、いえ。いいえ。私が御身の真名（しんめい）を謳うなど恐れ多い。

たとえ今は熟しておらずとも、実は確かに恵なのですから」
……何を言っているのか、よくわからない。ていうかヘイズルーンって雌山羊だよね？　それでいいのか？
ま、彼女の事はヘイズと縮めて読もう。
取りあえずは、彼女が僕の事を名前で呼ぶ気が無い、というのだけは理解した。
それならまあ、それでもいいか。困ることは無い。
そんなことは置いておいて、僕の事を尋ねに来た理由を聞こう。
そう、彼女はこの森に迷い込んだのではない。いや、そもそもこの時代で女の旅人がいること自体が珍しいことだが、彼女はどうやら、僕を探してここまで来たようなのだ。
僕の事を知る人間なんて、知ろうとできる人間なんて、村の連中ぐらいだが……こんな女はいなかったと断言できる。だってこんな美人いなかったし。
不思議なまでに透き通った肌に、すらりと並ぶ目鼻。水のように艶やかで、若木の様に初々しい、しかしながら千年樹の様な聡明さを持つ不思議な女は、見るだけで記憶に残るほど印象的だ。
こんな人がいて、目につかないわけがない。目立たないわけがない。男どもが、争わないわけがない。
故に、村の中にこんな女はいなかったと、断言できる。
そもそも、隠し子を抱えられる余地なんてどこにもなかったし。
……いや、本当にそろそろ常識を捨てないとな。場所が無くて人間を育てられ、食料が無くとも生きていける世界なんだ。誰かが隠し子にしていてもおかしくない。大方、こんな美しい赤子を他の人の目に触れさせたくない、という理由辺りで隠すだろう。
うん、自分なりに折り合いはついた。真実かどうかは分からないが、一先ずの納得は得た。今はこれでいいだろう。
「それでは折り合いも付いたご様子。本題に入らせてもよろしいですか？」
実は貴女、心読めたりしない？
不自然なまでにタイミングのいい言葉に戦慄を抱きながら、僕は彼

女の話を聞く姿勢を取った。
石の碗は横に置き、土の上に正座し直し、客人を汚した不名誉を押し付ける気ですかと脅して座らせた唯一の植物性の御座で姿勢を整えた彼女に向き直る。

「貴方に、衰退の物語を書いていただきたいのです」
ヘイズは、そう言った。

衰退……？
……「衰退」!?
その単語に、天啓のような閃きが僕に降りた。
「衰退、というと、つまり神秘の枯渇の切っ掛けかね？」
確か、前世で読んだ、というか熱狂していたスマホゲーの設定でそんなのがあったはずだ。
この世界があの世界なら、そういう意味なのかもしれない。
そういう思い辺りもあり、すらっと返せた。
「ええ、そうです」
そっかー。そうなんだー。
僕は空を仰ぎ――――――そして木々に覆われた天蓋を見て目を濁らせた。
僕、死んだな。

型月。そう呼ばれるジャンルがある。
特徴としては独特な魔術師という存在の見方に、数多の二次創作を受け入れる土壌。そして、作品を冒涜しない限り易々とチートができない、別名「転生者殺し」とも呼ばれる世界観。
当然、僕が今まで生きてこれたのが奇跡なぐらい、この世界は異物

に厳しい。星の防衛機構とかに排斥されてなくて、本当に良かった……

溜息をつきたくなるほど肝が冷える。こういう真実を唐突に突きつけるの、やめてほしい。

しかもその話によると今の時代は神代の最盛期。衰退以前の、神秘が栄えていた時代の事だ。

何だっけか？　月から襲撃が来るんだっけか？　んー、なんか違うな。軍神、アルテラがなんか関係してた様な……

ああ、そうだ。セファール？　とかいうでっかい奴が月からくるんだったか。月といえばムーンセル。多分ムーンセルの仕業だろうな。で、そのセファールとかいうやつの死体からアルテラが生まれたんだっけか？

だいぶ忘れてるというべきか、むしろよくこれだけ覚えてるというべきか……

一度、しっかり思い出さないとな。

「ふむ、だが、なんでそれを僕に？」

「はい、それについては、予言の存在、貴方の作が必須だからです」

「必須？　何故だい？」

「この世界はまだムーンセルの目についておりません。というのも、彼の知性持つ光の牢は別の星々の観測をしていることと、この世界の神性がガイアの存在を隠蔽しているからです。いえ、抑止力、と言い換えてもいいでしょう」

ははぁ、そういう事か。ムーンセルからセファールが送られてくれば、今の抑止力は代替わりをする。阿頼耶識が別物にすり替わると言ってもいい。今の阿頼耶識は、厳密には西暦のものとは違った……という設定のはずだ。当然、代替わりには先代の消滅が必要。阿頼耶識は消滅に抗うために抑止力を起動。という事か。

「ん？　ということは、そんなことをすれば僕は排斥されるんじゃないか？」

「いいえ、そうはなりません。できないのです。心当たりがおありでしょう？」

……確かに、僕の現在の文化活動は、ある意味で星の正史を揺るがすものとなり得る。本来存在しえない魂、未だ発見されない文字、製紙と記録の技術、概念に人格を与える術。

それらは正しく抑止力の粛清対象になり得るものだ。だから、今まで抑止力が働かなかったことで、僕はこの世界が型月だという可能性に思い至らなかった。

でも、何故？

何故僕だけが抑止力の影響を受けない？

カウンターガーディアンはいないのか？　抑止力は何をしている？

まさか……それが、僕の転生特典とでもいうか？

そんなの、まるで……

「……いや、今は置いておくか」

「はい？」

「何でもない。君が僕に執筆を依頼する理由は分かったよ」

「では――」

「――だが、何故書かなければいけないんだ？」

「……それは、どういう」

「そんなものを書くとなれば、神々も僕の命を狙いに来るだろう。何しろ彼らの生命源でもある神秘を消すのだからね。僕は今の安寧を逃したくはない。そもそも神々と戦える武力もない。それに、何より、だ」

「何より、君の目的が分からない」

「目的、ですか」

「ああ、そうだ。目的だ」

「……それを答えれば、書いていただけるので？」

……ああ、本当にやりづらいな。

このヘイズルーンとかいう女、此処まで一切表情を変えていない。何も読み取れない。完全なポーカーフェイス。出方が分からない

対処法が浮かばない。どうすればいいか、僕はとまどっている。
「いや、別に？」
だから、話の流れをぶった切ってみる。
「……は？　え？」
「いやだからさ、君の目的なんてどうでもいい。重要なのはリスクとリターンだ
僕の安全。僕のやる気を促す理由。
――この二つが、僕が依頼人である君に求める最低条件だ」
それは、至極まっとうな前提条件。
さぁ、理由も情緒もへったくれもない、商談の時間といこう。
「……？　……？　……？？？」
……混乱しすぎではないですか？
格好つけた僕がバカみたいじゃないですかやだー。
「……つまり、貴方は何を望むんですか？」
仕事人風の、真面目な雰囲気を纏っていたヘイズが小首をかしげた。
うん、多分こいつポンコツだ。
「そうだね、それじゃあ――」
何にしようか。

ああ、そうだ。
「――じゃあ、君が欲しい」
「……ふぇ？」
お、赤面した。

わたわたし始めたヘイズを眺めながら、僕はその依頼について考えた。
実のところ、僕はこの依頼に対して肯定的なのだ。何故かというと、面白そうだからだ。

面白そう。そう、面白そうなのだ。
依頼内容の整理として、改めてヘイズの目的を確かめよう。
「『衰退』の来訪の為に、月の観測器に観測されるよう、月の存在を観測する」
――怪物と戦う者は、戦いながら自ら怪物にならぬよう用心したほうがいい。　あなたが長く深淵を覗いていると、深淵もまたあなたを覗き込む。といったのはどこの詩人か。いや、哲学者か。
要は、月を観測すれば、月も観測し返すということだ。
それにより、ガイアは発見され、衰退の引き金は引かれる。
そして神は滅び、西暦を越え、人が栄える。
ああ、それはそれは、面白そうだ。
だから、僕はこの依頼について肯定的なのだ。
ではなぜこうも否定的な意見を口にしているのか？　神々に殺されかねないから？
――いや、それは違う。
ぶっちゃけて、僕は趣味の為になら死ねる自信がある。前世の死因もそうだったはずだ。覚えてないけど。
だから、僕が否定的な意見を口にするのはそこが理由ではない。
では何が理由かというと、気に入らないだけだ。
目の前で淡々と依頼してくる彼女が、こっちを何か装置であるかのように扱っている態度が。
いや、そういうつもりは無いのだろう。こうちがそう思っているだけだ。
でも関係ない。僕が気に入らなければ、そんな話は聞かない。僕は僕の生きたいように生きる。
だから、今、わたわたしている彼女を見て、僕は「書いてやってもいいかな」という気に成っていた。
無論、僕が書き上げる以上、手抜きは一切しない。それは僕の意地だ。
インクは僕の血を触媒としよう。筆は……この前見つけた苔生した老木から芯を取り、筆先はどこかで罠に捕らえた魔獣の体毛を使

う。
さて、紙はどの木で作ったものにするか……とまで考えて、目の前のヘイズの存在を思い出す。
「ああ、冗談だ、書いてや――」
「――ふ、不束者ですが、よろしくお願いします！」
「――るよぉ？　おお？」
初めの疑問は、何故今の時代のそんな挨拶を知る者がいるのか、という事だった。

唐突だが、僕の前世はボッチだった。
つまり対人経験が薄いのだ。それでもよかったし、そもそも僕は他人という存在が嫌いだ。
というわけで、この森の中での生活は中々に心地よいものだった。
それを、冗談で言ったことを真に受けた馬鹿が、いや、そんな冗談を言った僕が、ぶち壊した。
僕は空を仰いでこう言った。
「……また勝てなかった」
「はぁ……？」
僕は別に弱者でもないが、そんな気分だった。
今日も空は青いなぁ。青くて、きれいで、広くて、ああ。
嫌みかよ。
はぁ……
言動には気を付けないとなぁ。

執筆開始

まず、執筆するに至り、初めにジャンルというものを考えなければいけない。

「どうぞ、スープ出来ました」

「……ありがとう、ございます」

「はい」

ズズッと啜り、灰汁を取っていないそれに雑味に少し顔を歪める。

でもまぁ、うん、食べれないわけじゃないし、うん。

これは僕の考えだが、執筆というのはアイデアが重要だ。しかし、今回のように依頼されることだってあるだろう。前世で（広義で）小説家をしていた僕は、まま、そういう経験もあった。その時どうしていたかというと、リクエストされた題材から自分の好みを混ぜ、そして様々なネタをさながら闇鍋の如くぶち込んで風呂敷を広げていくのだ。

その所為で幾つエタったのができたことか……。いや、これは今は置いておこう。

兎に角、僕の好きなジャンル……というか、書き方というのは「成るべく弱い、或いは現実的な主人公」がいるということだ。もっと言うなら、「理由のある強さ、納得できる予想外」が好みである。

別にチートが嫌いなわけではない。疲れた時はあれが堪らなく効くのだ。だが、何故か自分で書くとなると、文章が雑なせいか、手も当てられないありさまになる。ぶっちゃければ無双物が苦手なのだ。

そして、今回依頼されたのは「衰退」の物語。さらに言えば、「ムーンセルの存在」を視野に入れた、衰退の経緯の記されたモノ。分類としては歴史書、預言書、空想歴史モノ、ＩＦ世界史みたいな感じだろうか？

苦手だ。

というか前世から歴史にはいい思い出が無い。文系気質なのにもかかわらず、社会の授業全般を毛嫌いしていた僕だ。当然日本史すらうろ覚えである。いいくにつくろう鎌倉幕府しか覚えてない。あ、い

や、「いいくに」じゃなかったっけ？　まあいいや。
僕は歴史モノが大の苦手である。それは別に既に決まった流れがあるから、とかではない。単純に、詳しくないので書けないのだ。
歴史モノの小説が嫌いというわけでもない。姉に勧められて「燃えよ剣」だったか何だかも読んだこともある。それで歴史モノは半ば官能小説染みていることを知った。
いや、そもそも神話その物が官能小説染みてるよね。
あれ？　じゃあ、官能小説書く要領でいいのでは？
……いやいやいやいや、何を考えているんだ。駄目に決まっているだろう。
兎に角歴史モノという観点からは逃げたいが、それはダメだろう。そもそもムーンセルが出てくる余地が少ない。アレを主軸に据えなければ、目的のものにならない筈だ。
だったらどうしようと……そう、そこなのだ。

ネタが、浮かばない。

甲斐甲斐しく世話してくれているヘイズさんには申し訳ないが、マジでこれ見通しつかねーぞ。どうするべ。
うーん、と唸る僕の横で、ヘイズさんが濡れながら鍋を片付けてた。
あ、こら、水精霊（ウィンディーネ）。ヘイズさんにちょっかいだすんじゃない。いや、そう頬膨らませても、駄目なものは駄目だ。いやいや、そう拗ねるなってちょ、やめ、服を掴むな絡まるな引きずり込むな――！
……ヘイズさん、何が面白いので？

さて、ネタに詰まったら何をするか。それは千差万別だ。
缶詰したがる奴もいるし、とりあえず脱ぎ始める奴もいるだろう。叫びだしたり、遊びだしたりすることもあるだろう。
僕は、とりあえず散歩することにした。
どうだい平和的だろう？　あ、こらそこ現実逃避って言わない。

立ち並ぶ木々はまるで人の通ることを考慮しておらず、尚且つ足元も木の根と石とで安定しない。この森は、いや、自然は余りに人に対して不便で、しかし全ての生命に対して平等に区内を与える。先祖が――自分の前世の――自然現象を神々として奉ろうとした気持ちも分からんでもない。

それらは雄大で、滾々と満ち溢れた生命の香りを裡に抱え、一つの生命の様に体内に入り込んだ者達へ厳しい。しかしながら、視点を変えればそこの土も、生える草の葉も、見上げた先にある丸々と太った木の実も、そこらに恵みと慈しみに満ちている。さながら、母の愛の様に。厳しくも暖かな愛を感じる。

ああ、成程と。

何故大地は女神となるのかは、これでよくわかろうものだ。

それを理解するに連なって、大空が男神とされる理由も分かった。

世界は天と地に二分される。そして地が母ならば、天は父以外にあるまいと。

天の存在が、地の存在を持ってのみ認識できるように。地の存在無くして天は語れないということなのだろう。

大地が無ければ、大空も単なる虚空なのだから。

……気の抜けた状態で、空想の翼を大いに広げた。世界は広く、しかし自分の世界は矮小だと自覚し、広い世界を隅々まで想像することで、矮小さを補うように。

生まれついた頃からだったか。僕は夢想するのが得意で、絵空事をよく語る子供だったらしい。嘘をつくのには躊躇いがあるが、絵空事を語るのには苦労は無かった。

成長していき、社交性が欠けて行くにつれて、僕は電子の海に飛び込む術を得た。当時はネットが民間で容易く手に入るようになったばかりで、電気代とか色々不便なことが多々あった。タイプライターを買おうかと思ったりしたが、やはりどこかで他人に自分の空想を見てもらいたいという気持ちがあったのだろう。

当然のことながら、僕はさほど大きな功績を残さなかった。見苦しくない文を書けるようにはなったし、タイピング技能も一人前以上に

はなった。アイデアも腐るほど湧いてきた。それでも、僕は名だたる文豪たちや、受賞者たちの列に名を連ねることはできなかった。だからだろう。僕は、自分の事を、胸を張って小説家だと説明できないのは。物書きにも満たない、独りよがりの駄文を撒き散らすだけの愚図だと、どこかで自分を見下していた。

自分の物語は嫌いではなかった。嫌いだったのは、自分の筆だ。文章だ。

まるで美しくない、何の工夫もなされず、何一つの自分らしさも見えず、書き手の顔も思いも見えない、一山幾らの書き捨て雑文。辺りを見回せば幾らでも心に訴えかける文はあった。参考にだってできた。

だが、僕はそれをしなかった。

面倒くさがっていたのだ。

結局のところ、僕という書き手は、自身の趣味の下に文字を垂れ流しているだけのクズなのだ。

だから、ヘイズの求めに応じようとしなかった。でも、どこかであの求めが嬉しかったのだろう。拒否をしなかったのはそういうことで、愚かにもまだ夢想を抱いているのだ。

僕の夢は大層な事だった。自分の文を読んでくれた誰かが、大いに泣いて、大いに笑って、そして称賛してくれることを夢見ていた。

それだけのことが、実は大層難しいのだ。

ヘイズは、そんな僕に書くことを求めた。それは、この時代にまともな書き手が僕しか居ないからの事だろう。

それでも嬉しかった。こんな僕が、今世で夢を果たせるかもしれないということが。

陳腐な承認欲求を満たすために、僕はヘイズを理由にしている。

別にこの事に後ろめたさは無い。唯、自己嫌悪のみがある。

僕は、何を書きたいのだろう。もはや理想も見えなくなって、見上げた空だけが青く澄み渡っている。

ああ、だから晴天は嫌いなんだ。

「……さて、とりあえず下書きだけでも始めるべきか」

酸化した獣の血と、寄せ集めた石を磨いて作った石板が目の前にある。

石板は石を寄せ集めたもので、持ち上げればたちまち崩れてしまうであろう。それはパズルのように組み合わさっているが、互いに支えあうことは無いのだ。

ここは川辺。いつも水を取る場所の上流。

水精霊も居らず、耳を振るわせるのは艶かしくも清らかな川の潺と、爽快でありながら力強い梢の音。

それ以外の一切、獣の息も、足音も、ともすれば自身の鼓動すらも消える、聖域の様な静寂。

僕は考える。最初に走らせるべき言葉を。駆けだすきっかけとなる、その始まりを。

無理な話だ。何をどう書こうかも決まってないというのに、筆を走らせるものか。

それでも指先を震わせて、僕は無理やり言葉を紡いだ。

「――始まりに理在り、次いで願い。そして神々は生まれ出づる」

一文が終わる。

構成は、まだできない。

「人がいた。星があった。王座を巡る星々に、人は神々を見出した」

飾りにしかならない、自己満足にあきれる。

こんな文で何を表せるのかと。

「そして、人は自然に神を見出した。即ち、神とは世界の理である」

それでも、だんだんと震えは収まっていく。

いつも通りだ。場当たり的に書き殴り、辻褄が合わなくなれば修正する。

それが僕のスタイルだ。

でも、きっと。
予感がする。
この物語は、求められる程の物ではないと。
「大小なりとも神はおわし、人はそれを崇め、尊ぶ。その名は神に秘めた法則――」
そんな予感に背を向けて、とりあえず書き続ける。
「――其れ、『神秘法則』なり」

「こんな感じかな」
思いつくままに書きなぐった分を見直し、感想を言う。
「うん、違うな」
そう、違う。違うのだ。
僕が求められた物語は、「神々の時代を終わらせる」物語。
一方で、これは寧ろ「神の扱い方について」の教本だ。
偏にこの時代を前提とする技術は、求められたものと相反する。
故に、僕は容赦なく水でこびり付いた血(インク)をふき取った。
……あ、やっぱ少しだけメモしておこう。なんかの役に立つかもしんねぇし。

僕は河原に寝転んで空を見上げる。
「あー……」
間抜けな呻き声を上げて、目を閉じる。
思い浮かべたことは、勿論、今回の依頼についてだった。
「衰退」の物語。
そも、この世界が型月だと知ったも驚きに成りえる経験であったが、此方の難題の方が遥かに重く僕にのしかかる。
「衰退」の物語とは何か。どこまでムーンセルを書けばいいのか。
どこまでがやりすぎで、何処までは最低基準か。
どこに向かうのか、どう描くのか、だれを描くのか。
何も分からないまま漕ぎ出した筆は、案の定暗礁に乗り上げた。
せめてジャンルだけでも決めるべきであった。先程書いた文はを

思い返せば、それは神話のようであったし、教本ともいえる簡潔さだったし、物語ともいえるストーリー性があった。しかし、そのどれにも及ばない質の低さが目に見えた。

方向性を決めなければ、延々とこの海域から出られない。とりあえず何か書いてみれば思いつくだろうか、などとは考えたものの、これと言って良い案は無い。

やはり、自分の得意な分野で書くべきだろう。とすれば物語。それも、複数人の思惑が入り乱れる乱戦もの。

だが、そうとなると結末が定まらない。うっかりでムーンセルからの危険評価が跳ね上がってしまえば世界が滅ぶかもしれないし、あるいは全く気付かれないこともある。

観測、というものはこの時代において極めて重要な意味合いを持つ。

神秘法則その物が、世界の目――僕が仮につけた名前――による誤認、或いは仕様を応用したもので、それで無くとも「見る」という行為は人が最も初めに会得した魔術の一つだ。そして、世界の様々な現象の中核になりうる根幹行為だ。

であるからこそ、世界を舞台にした物語は極めて面倒だ。難しいとかいう話ではなく、世界に与える影響が大きいからだ。下手すれば新たな神性が誕生するのだから。というか、した。水精霊たちがその例だ。

チャンスは一度。そう思った方が良い。途中の路線変更もできなければ、書き直しも効かない。

事前準備だけは万端に行えるが、シュミレーションをしたところで不測の事態に対応できるかは別だ。

物語の登場人物たる神々が殴り込んでくるかもしれない。急に路線変更したくなるかもしれない。なんか設定に矛盾が生じるかもしれない。

これは、僕がいつも適当に創作を行っているが故の問題点で、今まではアドリブで何とかしてきた問題だ。

だけれども、路線変更が難しいともなれば話が別となる。役者には

思い通りに動いてもらわないといけないのだから、アドリブは良くても、此方が急に指向性を変えることはできない。それをすれば世界に与える影響が減るかもしれないからだ。

……ん？

何だろうか。何か思い浮かびそうだ。まて、先程までの思考を反復してみよう。

アドリブ、即興、事前準備万端、チャンスは一回、物語……いや、「役者」？

そうだ、僕の書く物語の登場人物はキャラクターではない。役者なのだ。

あるではないか。役者たちを躍らせるに相応しい形式が。劇を行うには、舞台を用意して、そして台本を書き上げる必要がある。僕がするべきは台本を書き上げることだ。

だが、それだけでは不十分。咄嗟のアドリブ、機転はどうする。

不慮の事態に、どう対処する……？

そこが解決できれば、きっと物語は書き上げられる。

僕は確信した。

見つけた光明

何かが足りない。
そのなにかは喉元まで出かかっている。
しかし、口に出そうにもするりと抜け落ちて、無理に言葉にしようものならそっぽを向かれかねないめんどくささがある。
何だ。何が足りない？
頭を抱えて、思考を回す。
僕が書くべき形式は、台本だ。
この古代世界を舞台にした、壮大な神話の筋書き。考えてみれば当たり前のことだ。当事者が何らかの事態を誘発させようとすることを「裏で糸を引く」などというくらいだし、人形劇の様に全てを支配するとはいかなくても、形式だけは劇のそれに沿っている。
ならば、書くべきは台本しかない。ノンフィクションでも、歴史ものでも。どういうジャンルであれ、台本形式になるだろうことは決まっている。
じゃあ、そこから考えてみよう。台本に出てくる要素は四つ。
「物語」「ナレーター」「演出」「登場人物」だ。
ナレーターは登場人物と一致させてもいいかもしれないが、これらの要素が無ければ演劇は成り立たない。
……それは、裏を返せば、それらさえあれば十分劇として成立するということ。
登場人物はいる。北欧神話の神々の連中だ。
だが、演出と物語、それはどうする？
柔軟性を残し、臨機応変に……って、それもう実質筋書きなんてないも一緒じゃないか。
ソレではだめだ。いや、いいのか？
もともと無理な依頼だ。できませんでしたと言ってのけ、歴史の修正力に一縷の望みをかけるのはどうだ？
はっ、情けない。駄目に決まっている。
依頼された以上は書き上げる。それが僕のプライドだ。

だが、だが……

なにを、書けばいいんだ？

――いや、あるじゃないか。

考えてみれば、答えはもう喉元まで出ていたのだ。

要するに、筋書きがあるようでない、そんな台本ならばよかったのだ。

そして、そんな劇の存在を、僕は知っている。

即興劇（インプロヴィゼーション）。

設定と大筋だけ作る。物語は登場人物に紡がせる。軌道修正するだけでいい。

それだけで、いい。

ああ、簡単じゃないか。

思い至れば、後は怒涛の如くアイデアが湧いてきた。

基より、この世界は北欧神話に基づいている。ならば大筋はその通りになるようにすればいい。少し早めにギャラルホルンを吹かせる。スルトの代わりに、ムーンセルの刺客を登場させる。ムーンセルに存在を気付かせる、刺客を遅らせる方法は？　今の時代がムーンセルに不都合だと思わせればいい。何がムーンセルに対して不都合なことだ？　ムーンセルは観測機だ。観測できないことは不都合だろう。極めつけに、観測できない所にムーンセルへの害意が存在し得るなら更に良い。

そうだ。簡単ではないか。簡単なことなのだ。

僕がやるべきことは少ない。

大まかな筋書きを仕立てる。軌道修正しながらエンドロールまでもっていく。その為に必要な演出を担うのは僕だ。

神々を掌で踊らせてやろう。なに、僕ならできるはずだ。

なにせ、僕はこの世界で唯一、神を正しく扱っているものなのだか

ら。
北欧神話の始まりは、巫女の予言で始まる。ああ、なんだ。都合がいい。ヘイズに頼もう。今気づいたけど、名前までちょうどいい。彼女に予言を伝えてもらおう。
月の観測機の存在を神々に教えよう。その存在が不都合だとわかれば、神々は対策するだろう。そうすれば、『衰退』まっしぐらになる。
問題は、途中で起こり得ることへのアドリブ。軌道修正するための情報把握能力。
ある程度は投げ出すしかない。僕の手は二つしかない。体は一つだ。複数の問題が起こっても、一斉に対処はできない。ヘイズの手を借りようが、限度がある。
だから、動くのは深刻な問題にだけ。それ以外の時は工作活動に専念しよう。
そうと決まれば、書くべきものがある。それは脚本でも小説でもない。
手引書（マニュアル）なのだ。

「――ヘイズルーン。居るな」
「はい、此処におりますが……どうされましたか？」
「いや、なに。依頼が特殊すぎたからね。君にも手伝ってもらうよ。依頼内容は『この世界に衰退を齎すこと』でいいよね？」
「はい、そうですが……」
よし。僕はほくそ笑む。
訳が分からないという風に小首を傾げるヘイズに、僕は言った。
「ヘイズルーン。死んでくれ」

北欧神話。別名、スカンディナビア神話。
キリスト教化以前の、北欧全体に広まったスカンディナヴィアの人々――ノース人の信仰に基づく神話だ。

その中でも重要視されるのは、世界の始まりと終わり。それが作中で明言されたのは、オーディンが呼び出した死霊の巫女、ヘイズから予言を聞き出したからだ。

かつて片眼を捧げて魔術を知り、首を吊ってルーンの秘を知った彼は、その偏狂的な知識欲から世界の始まりと終わりを知ろうとする。

既に死者である巫女はオーディンを恐れる必要が無い。彼女は飽くなき知識欲を持つオーディンを浅ましいとするが、オーディンは神々の王を務めるならば、全ての叡智を持たなければならないと主張して聞き出した。

オーディンとは、古ノルド語において「狂乱（した者）の主」という意味がある。その狂気じみた知識欲もそうであるが、彼は理性的な一面とかけ離れ、過激な性格も見せる。

……いや、それは王となる者の定めでもあるのだろう。オーディンは来る終末に備え、ヴァルハラにて戦死者の訓練をする。この逸話から、オーディンは戦争と死の神でもあるとされる。また、ルーンの秘を知ることから、言葉を綴る詩人たちの神ともされる。

オーディンは、知恵と計略に長けた神なのだ。数多の名を持ち、神々の王である彼は、しかしそれでも死すべき運命を定められている。

ああ、僕に前世の知識があってよかった。心からそう思う。

前世の知識にある北欧神話。これの大筋をなぞり、所々に改変を入れつつ、この神話世界に終末を齎す。

条件は不平等だ。向こうは無数の神がいるというのに、此方の陣営は二人のみ。

しかし、頭では対等に渡り合える。ルーンの秘を知り、全知全能を謳うオーディン。神の秘を知り、この世界の終わった後を知る僕。

そして何よりも大きなアドヴァンテージが、彼らが僕らの存在を知らないということだ。

僕らは弱い。神々の一柱でも、容易に殺し得る程度に弱い。

ならば気付かれなければいい。たとえ如何なる万能性を有していたとして、それを振るうものが振るうべき対象を見つけられなければ

意味がない。
だからきっと、オーディンは知を求めた。万能性を正しく振るい、自信を盤石となすために。
勝利条件は簡単。
気づかれず、北欧神話のシナリオを動かす。
物語を紡ぐのは、僕の仕事だ。神話もまた物語。
ならば、神話そのものこの世界は、もはや僕の支配下にあると言っても過言ではない。
だからできる。
根拠は無い。
だけれど、失敗する気はしなかった。
前世以来の高揚感。それが僕を襲う。
これから一つの壮大な世界を書き上げるのだ。ああ、それは、とてもとても楽しそうで。
何より、書き手冥利に尽きるじゃないか。
嬉々として筆を走らせながら、頭の片隅が疑問を呈する。
――そういえば。
なんで、ヘイズはこの世界を終わらせたいのだろう？

……なんて、格好つけたところで。
さて、それからの執筆状況を切り出してみよう。
まず念頭においてほしいのは、何かくときに肝心なのは、書き出しであるということだ。
どのくらい重大なのかというと、書き出しによってその後の内容の質が決定されるぐらい、といえばいいだろう。
少なくとも、僕は書き出しを最も重要視しているし――

――書き出しを、最も苦手としていた。
「あの、まだ書けませんか？」
「もうちょっと！　もうちょっとまって！」
「そのー、先程から思い付きで付け足す部分が多すぎるように見受けられるのですが……」
「それが僕の執筆だからね！」
「あ、はい……」
大見得を切って、「死んでくれ」などと恰好を付けた後に、この無様である。
もし僕が小説を書くなら、必ずこの二つのシーンは切り離すだろうね。台無しになるもん。
「その、僭越ながら申し上げますが……酒場でからまれた際の対応など要らないと思うのですが……」
「いいや、要るね。きっと要る」
「そんなモノまで含めると、紙幅が酷いことになりませんか？」
「大丈夫！　何とかできるから！　魔法で圧縮したり、神秘法則で閲覧端末作ったりするから！」
「は、はぁ……」
呆れている。寧ろ蔑みの感情すら見える。
というかこれ、もう台本じゃないな。ゲームブックって言った方が近い。
「〇〇となったら、〇〇〇〇Pの〇〇行目へ飛べ」「〇〇してしまったら、〇〇〇Pの行動をすること」なんて、考えられる限りの想定外と、最善の道筋と、最悪を避けるための前提条件を書き綴る。
そのはずだったのだが……
書き出しが、致命的だった。僕はやってしまったのだ。
「第一項：死んだ後の行動」
そう書きだしてしまったから、第二項第三項……いつの間にか宴での振舞い方まで書いてしまっている。
嘗てないほどの速さで動いた手は、残像を生み出していた気がす

る。きっと気のせいだ。少し石板が溶けているが、なんかそこら辺の魔獣の血に酸性が含まれていたに違いない。さもなくば植物の液に。
ぶっちゃけ、これもう目を通すだけで一日かかりそう。端末化して、検索機能つけないと……
「あー、仕事、多いなぁ……」
「増やしているのは御身では？」
ごもっともです。

「ふぅ、きゅーけーっと。水くれ」
「はいはい、今汲んできますね」
呆れた顔で水瓶を取りに行くヘイズ。ここ数日の同居生活で、だいぶ親しくなった自身がある。
妙に敬意を示してくる態度が気に成るが、今の時代の女性何て多かれ少なかれそんなところがあるものだ。中にはむしろ、油断してると喉元食いちぎってきそうなやつもいるけど。やっぱ人はどこでも千差万別だな。
ちょろちょろと流れる音を聞いて、僕は傍らに目を移した。
ここは川辺である。今回の執筆中は此処にいると決め、数日間水精霊と共に過ごしてきた。
水精霊の寂しさを紛らわせるため、というだけの理由ではない。ここの水は水精霊がいるせいか、不思議な性質を帯びているのだ。
それは、この水を基に作り上げた液は水分を保持し続けるということ。
岩に書き綴ろうが定着し、紙に垂らそうが液体の光沢を失わない神秘的なそれは、こういう一大仕事の雰囲気作りにちょうどいい。なんか「今すげぇかっこいいことしてるっ」という感じが出るのだ。
雰囲気作り以外の意味はさほどないけれど。
だって神秘の触媒が欲しければ魔獣の血や僕の血とかで十分だし、今使っている老倒木を削りだした筆でも十分なのだ。これ以上は必要ないし、今回の仕事は魔導書作りでもない。
魔導書なんて、二、三冊作っただけだが、それでもこの性質は必要

ない。水精霊の河水は、そもそもが僕の雰囲気作りの為の素材なのだ。
しかし雰囲気作りと侮るなかれ。雰囲気というのは大事なのだ。
雰囲気で分かりにくければ、やる気と言い換えてもいい。モチベーション維持の重大な役目を果たしてくれるのだ。
「あー、疲れた」
水瓶を取りに行ったヘイズは、まだ帰ってこない。
そういや最後に水呑んだのいつだっけ？
……昔の人間って、本当に生命だったのかな？　型月補正があろうと、ショコズみたいな生命力に納得がいかない。なんか身震いする。
「……と」
目の間の凝りを自覚する。肩もだ。いや、全身と言ってもいい。
長いことじっとしていたからだろう。手は腱鞘炎なりかけ、それ以外は身動ぎするだけでバキバキと鳴る。
これは休憩が必要だ。さっきの判断は、正解だな。
「さて、水精霊（ウィンディーネ）。少し遊ぼうか」
パシャパシャリと水面を叩き、喜びを全身で表現する水精霊は、その整った顔立ちにも満面の笑みを浮かべた。かわいい。
では何をするか。水かけ？　綾取りやお喋りなんてのもいいだろうか。或いは知恵比べとか、軽い喧嘩とか。それとも、適当な自作ボードゲームでもヘイズに持ってこさせようか……
ぬ、さっきもそうだが、なんか自然とヘイズをこき使うのに慣れてきてる。なんでだろうか。
ま、いいか。
ヘイズはあれだ、なんか駄目男製造機って感じがするし、だからだろう。
「あっはは、やったなー」
――♪
なんて。
結局水かけを選んだ水精霊の手で、僕はびしょぬれになっている。

笑顔で緩く言ってるが、内心は極めて真剣だ。ムキになってきてる。
神秘法則を応用して水精霊の支配領域を切り崩そうとするが、もとより水の――ことこの川の支配者である水精霊には動じても優先性において一歩劣る。
ならば放たれた水を支配……と思ったが、それもできなかった。放たれた水にも支配権を及ぼしているらしい。君そんなことできたんだね。
そして僕はズタボロに負けた。
当然の結果であった。
「はっ、くしゅん」
我ながらかわいい声が出た。うん。一瞬自分の女体化物語が浮かんでしまった。
そのプロット――何故かすらすら浮かんだ――をかき消し、川辺で水面を見つめる。傍らには水精霊が座り、もう片方にはいつの間にか戻ってきていたヘイズが。
水瓶で水を掬い、水を飲む。今更ながら手で救えばよかったのでは？　などと思ったが、持ってきてもらったのだからこれでいいだろう。

流れる水を見て、思いを馳せる。
それは遥か昔。前世の記憶。
どこかで、何かを川の流れに例えていたなとふと思い、それを探っていた。
答えはすぐに出た。運命だ。
運命というのは実に面白く、前世で物を書く際には大なり小なり物語の中に取り込んでいた。
特別なことではない。運命にあらがう。滅びの運命。そんなフレーバー的なものから、主人公の特殊性を際立たせるための舞台装置。様々に役立つ、使い勝手のいい概念だっただけの事。
……ん？　使い勝手のいい？
あ、そうだ。

「……あの、王よ。いきなりどうされ――何をっ!?　ちょ、ま、何をされているのですか!?」
「あはははは！　思いついた！　ああ、妙案（エウレカ）だ！」
――♪
そして、岩の砕ける音が響く。
それこそゴング。神代を終わらせる戦いの、その号砲となったことを、まだ誰も知らない。

「な、なんてことを……」
「まぁまぁ、何とかなったし、別にいいじゃん」
「でもわざわざ書き上げたものを壊す必要ありませんでしたよねっ!?」
それはそうだけど。
でも素直に言えない。言ったら「ほらやっぱりぃ！」なんて言って首を絞めてきそうな気がする。
でもま、もう事は動き出してしまったのだ。書くべきものも書き上げた以上、やってもらうことはやってもらわないと。
「ま、ヘイズ、ちゃんと台本は読み込んだね。非常時とかの対応マニュアルも」
「はい。だいぶ苦労しましたがね……」
恨めがましい視線には、もう少ししか畏敬の念が見て取れない。随分と馴染んだものだ。
それはともかくとして、もうするべき下準備は無い。後はヘイズが死ぬだけだ。
「僕がやろうか？」
「……いえ、私が、自分で」

「そう」
首吊りって割と苦しいらしいよ、と僕の編んだ縄を持つヘイズには言えなかった。
その代わりに、僕も覚悟を決める。
今回、僕は書くだけでは役割を、つまりは仕事を果たせそうになかった。
というか、こんな面白そうなこと、筆者である僕が特等席で見れないなんて嘘だ。
だからこそ、僕も動く。この森とは暫くお別れだ。もしかしたら、ずっとかもしれないけど。
僕はヘイズが死ぬのを見届けて、心の中でだけぼそりと呟く。
さあ、北欧神話を始めよう。